

当施設における *Globicatella sanguinis* の細菌学的特徴と検出状況

© 米山 順子<sup>1)</sup>、平田 京子<sup>1)</sup>、星 紫織<sup>2)</sup>、東田 和子<sup>3)</sup>

株式会社エスアールエル GP 西日本検査部 ALF 細菌検査課<sup>1)</sup>、福岡市医師会 臨床検査センター 検査2課<sup>2)</sup>、株式会社エスアールエル GP 西日本検査部<sup>3)</sup>

【はじめに】*Globicatella sanguinis* は、1995年に正式に新種記載された通性嫌気性のグラム陽性球菌である。高齢者の尿路感染症の原因菌となるが、感染性心内膜炎、ウロセプシスなどの症例報告もある。今回、質量分析法導入により菌種同定が容易となった *G. sanguinis* の細菌学的特徴と検出状況に関する後方視的検討を行ったので報告する。

【対象と方法】2022年11月から2023年10月の間に、当施設において患者材料から分離された *G. sanguinis* を対象とし、データベースの解析を行った。同定検査は、質量分析装置 MALDI Biotyper smart (BRUKER 社)を用いて行った。また、分離菌株の生化学的性状の確認も実施した。

【結果】*G. sanguinis* は、5%ヒツジ血液寒天培地上で  $\alpha$  溶血を呈し、Gram 染色では、短鎖連鎖状の形態を示す。カタラーゼ陰性、PYR 陽性、胆汁エスクリン陽性、硫化水素非産生であった。質量分析法による同定では、score value は 2.00 以上、菌種レベルで一致した安定した結果が得られた。期間中に分離された菌株は、尿検体 183 株、血液検体 6 株、膿検体 4 株の総計 193 株であった。そのうち、男性 14 株

7.3%(14/193)、女性 179 株 92.7%(179/193)、年齢の中央値は 90 歳であった。混合感染の割合が高く、その菌種は多岐にわたった。また、薬剤感受性試験では、セフェム系、マクロライド系、ニューキノロン系に耐性傾向で、メロペネム非感受性株は 46%に及んだ。メロペネム非感受性株の中で各種抗菌薬に対する感受性試験結果を分析すると、セフェム系耐性の割合は高くなり、ペニシリン非感受性株も 33%に見受けられた。

【考察】同定検査は、質量分析法が迅速で有用であった。当施設では、高齢女性の尿からの分離頻度が高く、有意差を認めた。耐性菌などと複数菌で検出されることが多く、また、幅広い抗菌薬に耐性傾向であることから、抗菌薬選択には注意が必要であり、注視する菌種と考える。

【結語】いまだ認知度が低い菌種であるが、尿路感染症のほか、ウロセプシスの起炎菌としての認識も重要であるため、*G. sanguinis* に関心をこれまで以上に高める必要がある。正確な菌種同定は、適切な抗菌薬治療に繋がるため、臨床貢献できると考える。 連絡先 050-2000-4854